

秋風の音さへさむくなりけり

夜すがらゆらぐ庭のいと萩

夕闇を白き窓掛さとゆれて

風にひとしきり琴の音さこゆ

今宵また友がみ墓に物いひて

暫しの夢を忍びて泣きぬ

今宵照るこの月影よ永久に

さへぎる雲のそれなかりせば

露に遠くとほく翁の影さえて

夢山あたりたゞはの暗さ

秋風にやがて行かむす水草の

幸にも似たりわが身いく年

こゝを夕暮母やいとしの海路山路

ねぼろの果てに夢とまがきつゝ

枯れくの虫のなく音にあこがれて

月いづる頃を一人さ迷ふ

人の植えし花も枯れたり人の灑さし

水も洒れたり今日この夕暮

面かげを草にゑがきてしまらくを

香の烟にあはれ咽びけり

フレーベル會俳句端書集

一、課題 冬季雜吟 一人十句以下

一、締切 十二月二十五日限り

一、披露 明治卅八年二月發行本誌文苑欄

一、賞品 天地人三座には美景を呈す

一、撰者 當分本會の撰とす

一、投稿 本誌購讀者は何人にてても投吟する事を

得用紙は繪葉書に限り(眞筆刷物隨意)

住所氏名雅號を明記し必らず左の名宛にて送らるべし。

埼玉縣入間郡芳野村

フレーベル會俳句掛

鹽野奇零宛

第五回俳句端書集

様々の家例もあるや夷講 長野 飯塚曉霞
 水仙に星の影さす小庭かな 同
 旅衣の幾年振りや鉢叩 同
 したゝかの密柑投げゝり夷講 東京 平岩學洋
 木に金のなつた話や夷講 同
 荒磯や今出た月に啼く千鳥 同
 仙臺の角錢も出て夷講 仙台 立花一瓢
 消え残る焚火の淋し啼く千鳥 同
 松風に憂き旅を知る千鳥哉 陸奥 須藤美佐

秋刀魚るかけ聲高し夷講 東京 松の舎
 水仙や白きが中に黄なる色 同
 分りにくき經の文句や鉢叩 同
 漁火に年の懺悔や啼く千鳥 尾張 田中松窓
 日當りや佛師が庭の水仙花 同
 水仙や机の上の四書五經 同
 頬杖に目を休めけり水仙花 神田 松本のり
 水仙や窓を明ければ鳥の立つ 埼玉 會田松聲
 日に近き机の上や水仙花 同
 荒磯に星の光りや啼く千鳥 羽前 門地いち
 舟宿に縮まつて寝つ啼く千鳥 大分 阿部喜久
 煩惱の慾は忘れて鉢叩 同
 貧寺や山茶花散て雨多き 本郷 櫻井とみ
 月落ちて客の戻りぬ夷講 堺市 原田まさ
 山茶花の日蔭に咲くや花稀に 福岡 遠藤眞水

山茶花に大根干したる日南かな 小石川 平野さだ

鉢叨淋しき町を後もどり 同

沙婆に迷ふ人の多さよ鉢叨 長野 黒田玉水

椽側にカナリヤ籠や水仙花 大阪 松風庵

鉢浅く水凍りけり水仙花 同

筆筒に孔雀の羽や水仙花 同

千鳥啼く月影細し磯の松 群馬 松島松聲

波音は別に聞えて啼千鳥 同

山茶花や裏の境もなき住居 同

山茶花にふと目のとまる藁屋哉 京都 鈴木久能

福相な主人の顔や夷講 町田せん

尼寺の障子古びぬ水仙花 同

松風に聲絶々や小夜千鳥 同

三 光

天、藪蔭の水仙寒き蕾かな 須藤美佐

地、小雨降る入江に淋し夕千鳥

飯塚曉霞

人、生臭き路次を出でたり鉢叨

立花一瓢

追 加

無一庵奇零

主従皆一座になりて夷講

長生の耻語らへぬ鉢叨

面白き後ろ姿や鉢叨

四君子に耻ぢぬ操や水仙花

山茶花や盛り過ぎたる庭の寂

明星の江越しに見えて啼く千鳥

